

## 千葉県市原市における漢文石碑・資料の翻刻(四)

—千葉県昌胤(旧名山下亀吉) 関連資料 その一—

辻井義輝

前稿に引き続き、旧市原郡内における漢文石碑・資料の翻刻を行ってゆく。本稿は、前稿で触れた千葉県昌胤(旧名山下亀吉) 関連資料を扱う。

なお、このたびは、山岸弘明氏、野田里美氏、二松學舎大学図書館、千葉県立中央図書館に格別のご協力を頂きました。皆様に改めて感謝を申し上げます。また、本誌査読委員からも懇切なご教示をいただきました。この場を借りて、お礼申し上げます。

### 凡例

一、本稿で取り扱う漢文碑・資料は、各時代の価値観や生活誌が窺えるものや、歴史的事件を表記したものなど、文化的・歴史的価値を有するものに限る。

一、単に物故者の俗名や戒名、係累、没年月日などを記したものは基本的に省く。また、宝塔の類も、通常、陀羅尼經の文言を連ねたとどまるため、基本的に対象から外す。但し、高名な漢学者による文は、それ自体、文化的価値を有するものである

ため、全て翻刻の対象に入れる。さらに、代官名主、名主家の資料については、地域で長期間にわたり名望家と目されてきたと同時に、地域の歴史に深く関わってきた存在であったという歴史の意味に基づき、特記する場合がある。

一、翻刻にあたっては、異体字・隸書・篆書・草書は、できる限り正字体に直す。

一、原文は基本的に全て白文であるが、それぞれ句点を施すこととする。(但し、一部のものには、もともと句点が付されているため、それはそのまま反映させる。その際はその旨特記する。)

一、判読不能の箇所には□を附し、脈絡や残存字形から類推して読み取った文字は( )で覆って表記する。空白箇所には(空)を付する。

一、原文は追込みで表記することとし、改行は「」で表す。

一、行政区画については、便宜上、明治三十年四月施行の「郡」表記、明治初期における「村」表記を用い、さらに村内の集落については「○○地区」と表記する。

千葉昌胤は、慶応二年二月、旧八幡村の飯香岡八幡宮社家（祝子職）山下賢治源庸信の三男として生まれ、幼名を亀吉といった。明治十九年七月から、明治二十一年十二月にかけてのいずれかの時点で、旧今富村の千葉禎太郎の養子となり、昌胤と改名した。後、若狭四方蔵の長女わかと結婚し、明治三十年十月、長女よしが生まれた。<sup>1)</sup>その他の伝記的事項については、『房総人名辞書』（千葉毎日新聞社、一九〇九、一一四頁）に詳しい。以下、該当箇所を全文引用する。

ちばまさたね（千葉昌胤）市原郡海上村の人なり、明治十四年春三島中洲の二松學舎に入り卒業後同學舎の幹事及教授を囑託せられ兼て杉浦天臺の東京英語學校長時代より日本中學校の講師たりし等其の漢學に於ては夙に出藍の譽れあり明治廿七年冬韓國度支部補佐官の聘に應じ二松學舎及び日本中學校を辭して同國に赴任し官制の起案、文書の翻譯等に從事せしが後宮内省奎章閣の囑託により皇室の圖書十有五萬卷の整理に従ひ其漢文家たる盛名は蔚然として同國儒生紳士の間に噴々たるのみならず彼地に於ける新聞大韓日報及雜誌朝鮮等に於ても適所適材の評あり、夙に起き晝寢の習癖あり忠臣義士の時代講談物を愛讀す、長女芳十三歳京城居留民團立第一尋常高等小學校の尋常六年級にあり、性至孝、作文は級中の優位を占む、現住は韓國京城黄金町二十一番戸なり

なお、昌胤には玉玻越山平三郎との共同編纂による『利劍』（明治二十二年十月十四日出版、北村金次郎発行）があるが、これは漢文、

英文、和文からなる名文集であり、本稿の対象から外れる。この書は、後、『新寸鉄』（明治二十六年五月五日、上田屋大売捌）と改題されて再出版された。

また、前稿で取り上げた資料二十九「先考桑山府君墓碣銘」（千葉禎太郎撰、明治十七年）は、小金沢久吉編『昭代金石文』（明治三十四年、国会図書館デジタルライブラリー）において、原碑における「永胤」を「某」に改め、撰者を「鹿峰 千葉昌胤」と変えた上で、原碑を忠実に翻刻した体で掲載している。この点において、同記述は明らかな不正である。しかしながら、まだ昌胤も健在であった時期の出版であり、あるいは、この碑文の真の撰者が昌胤であり、それを禎太郎撰として墓碑に刻字したのが真実であった可能性も検討すべきかもしれない。

#### 資料三十六 『陪遊録』

当該資料は、明治十九年三月、三島中洲が旧市原郡今富村千葉禎太郎に招かれた際、三島に随伴した山下亀吉（後の千葉昌胤）が漢詩文で綴った行遊記である。三島中洲著『南総応酬詩録』に附録として付けられ出版された。房総の風光明媚な光景を少壮の詩人ながら、巧みに詠っている。原典では、全体の四分の三のスペースに本文を記し、上方四分の一のスペースに三島中洲、森槐南による詩評を記している。これら詩評は、すべて注で示した。また、末尾には三島中洲、川

北梅山<sup>(2)</sup>、森槐南<sup>(3)</sup>による総評、さらに、千葉貞吉による跋文が添えられている。奥付には「明治十九年六月三十日御届、全年七月出版、著者 東京府士族 三島毅 東京麹町區壹番町四十五番地、著者 千葉縣平民 山下龜吉 東京麹町區壹番町四十六番地寄留<sup>(4)</sup>、出版人 三重縣士族 齋藤次郎 東京麹町區壹番町四十五番地寄留、発行書肆 商弘所 東京中橋和泉町五番地」と記されている。『陪遊録』の原典には、末尾の総評と跋文を除いて、もともと、句点と圈点がついている。句点漏れも見受けられるが、本稿はそれをそのまま反映した。但し、末尾近くの「來時は雨去時晴晴。」は明らかな誤りであるので句点を改めた。末尾の総評と跋文については独自に句点を付した。

なお、「舎後<sup>(5)</sup>有假山……」の後の二詩は、かつて森春濤編『新文詩別集』二十四号に「對潮亭自題」と題され、「鹿峰小史<sup>(6)</sup>」の名で明治十五年に発表されている。但し、その際「蚤」は「漁」と、「淡」は「澹」と、「兼」は「儘」と、「漁人」は「垂綸」としていた。さらに、この二詩のあとに「湖山曰、二律宜做一篇對潮亭記讀。槐南曰、風格適上天趣、自然不厭百廻吟。」(句点筆者)と小野湖山と森槐南による詩評が付されていた。また、「題村莊詩」の二詩は、「題梅花村莊壁」と題され、「鹿峰 千葉昌胤」の名で、前者は、明治二十一年九月、『学』第三篇に、後者は明治二十一年十月、『学』第四篇で発表された。但し、その際「正」を「將」に、「妝」を「装」に改めて発表された。これらの原文は、全て国会図書館デジタルライブラリーで閲

覧できる。

千葉貞吉は、もと伝内<sup>(5)</sup>といひ、のち貞吉、さらに義胤と改め、大正二年十一月十二日、享年四十五歳で死亡した<sup>(6)</sup>。

なお、この「陪遊録」の訳読について、筆者は「三島中洲、藤森天山、小永井岳、巖谷一六、川田甕江らと千葉県旧市原郡の文人たちとの交流——『南総応酬詩録』『陪遊録』を中心にして——」と題して、『江戸風雅』誌に連載発表中である。「陪遊録」にでてくる多くの登場人物たちについても、同誌で逐一、解説している。

#### 陪遊録

門人 鹿峯山下龜吉稿

中洲先生老益壯。好山水遊。歲之丙戌三月。挈令郎士胖君遊我南總。蓋與余義甥千葉貞吉陪從焉。顧余平生埋頭於破帙間。塵埃汨汨。乃命余及義甥千葉貞吉陪從焉。顧余平生埋頭於破帙間。塵埃汨汨。不免山水嘲。今忽辱此命。喜而不寐。坐以待旦。

廿五日拂曉出都。先生與誠齋乘腕車。士胖君貞吉及余駕馬車先發。是日微雨。寒氣迫衣。凄然如秋。余謂二子曰。恨不携一瓢酒。既而過市川抵船橋。雨霽見日。相顧欣然。此間乍而麥蔴菜圃。乍而竹籬茅屋。車窗不能諦視。而西沿海紺碧千里。與豆相諸山相映帶。宛然如畫。

菜黃麥綠一邨邨。山欲眠時水欲奔。風景天然靈活處。詩乾坤又畫乾坤。<sup>(9)</sup>

午牌達千葉街。訪家仲兄。仲兄豫具酒肉以待。一醉醺然。氣力頓加。亦足以忘今朝雨中之苦。辭去到八幡驛。憩家伯兄對潮舍。以待先生。伯兄頗好文事。聞先生之遊。喜弗能措。屢出門以望。余去年不幸失家嚴。感淚交腮。遂詞墓。賦一絕。

供罷蘋蘩感有餘。廿年蝶夢枉蘧蘧。一言泣報黃泉下。兄解勤家弟讀書。<sup>(10)</sup>

舍後有假山。貞吉誘士胖君登之。指陳遠近山水之勝。余曾有詩。附錄于茲。

小築居然枕綠灣。風塵不到即仙寰。天連水處雙峯聳。雲出岫邊孤鳥還。蟹舍蟹莊疎密裏。淡煙微雨有無間。詩人兼作漁人長。柔櫓輕舟去自閒。<sup>(11)</sup>

菱葉蘋花小釣臺。斜陽一半畫圖開。誰歟隔岸吹笛。我正鉤簾獨舉杯。螺髻雙姑青窈窕。風標公子白徘徊。頭銜笑署新漁隱。消受涼風海上

來<sup>(13)</sup>

既而車聲轟然。出迎則先生也。家母伯兄相謁。茶菓閑晤。先生登假山。徘徊賦七絕賜余。次韻以呈。

水自吐煙山吐雲。此如青黛彼如紋。貧家別占風光富。欲博先生錦繡文。<sup>(14)</sup>

驛距誠齋宅二里半許。日將晡。誠齋促先生。辭伯兄。渡養老川。天暮雨至。路之凹凸與車之艱危。挽者勞而乘者疲。初更始達。痛飲就寢。

廿六日從先生遊誠齋梅花村莊。用土肥石齋翁韻。得一絕

紅塵掉首出京華。來訪白雲深處家。點檢春光十分好。么桃花映老梅花。<sup>(15)</sup>

余會有題村莊詩。附錄于茲。

流水潺湲繞堵牆。幽禽啼歇正昏黃。林間月出花痕白。壁上煙生酒影香。吹笛有仙傳遠韻。賣珠無婢不新妝。欲題佳句酬佳景。醉後吟眸奈

渺茫。<sup>(16)</sup>

淡煙一抹弄新晴。過眼春光也有情。坐客風流皆傲世。主人澹泊不沽名。高山流水琴心古。踈影暗香仙夢清。林下掃苔相對酌。天風吹落翠禽聲。<sup>(17)</sup>

過午誠齋爲先生招石齋翁及鶴矢・佐久間・元吉・伊藤・小出諸君十數人開宴。既而客散。先生示柴原議官宅看梅近作二律。命次韻。

陪遊何幸共清歡。又借梅林仔細看。風磬欲敲香雪墜。苔根渾訝老龍蟠。野人於禮淡如水。夫子之言幽似蘭。此景此情皆道味。居然忘却世途酸。

一。座。新。知。與。舊。知。酒。三。行。後。眼。迷。離。梅。花。逢。雨。有。矜。色。山。態。隨。雲。無。定。姿。所。愧。才。疎。吟。易。苦。更。兼。腕。弱。筆。難。奇。自。嘲。自。解。君。聽。取。曾。學。文。章。不。學。詩。<sup>(18)</sup>

此夜先生次巖古梅韻示鶴矢君。余亦微響。

幾生修到小神仙。占斷乾坤以外天。夢裏珊珊環佩響。月團圓處抱花眠。<sup>(19)</sup>

四、更、夢、覺、欵、枕。則、先、生、依、然、挑、燈、拈、韻。余竊嘆昔范堯夫晝夜肄業。置燭帳中。夜分不寐。今先生學貫古今。年亦垂耳順。尚勉強如此。我輩懶眠。豈不慚愧乎。因起執筆。記此日之事。

廿七日先生赴元吉君招飲。余亦從焉。酒酣。主人延先生於其觀稼樓。樓眺望絕佳。二十四村落之景。悉聚寸眸。先生僅着坐。咄嗟賦詩。余退次其韻。

秋。醉對春風倚書樓。繞田綠水漲如油。定知花謝鶉啼處。笠雨蓑煙遇麥

又獲一絕

南陌東阡曲又斜。萋萋草色夕陽加。無人種箇閒桃李。一種春風野菜花。<sup>(20)</sup>

廿八日從先生赴佐久間君招飲。途上步先生行德驛近作韻。賦所見。

桃菴杏村西又東。吟眸都在書圖中。多情堪羨還堪惜。春事年年屬野翁。<sup>(21)</sup>

既到主人置酒於其養老山房。酒醇魚鮮。余頃刻耳熱。乃穿屐步庭。獲一絕。呈之先生。先生次韻以賜。

映對青松與白梅。夕陽影裏且徘徊。他年修得斯文後。養老山房養老來。

醉後登秋暉樓。樓所見。與觀稼樓同景而異趣。先生有詩。余欲次韻不得。夜歸乃賦。

林、月、煙、籠、竹、裏、扉。疎、燈、如、豆、影、依、微。一、灣、流、水、小、橋、外。只、有、詩、人、扶、醉、歸。<sup>22</sup>

此日小出君索勿來關咏櫻圖題詩。先生席上走筆。賦贈一絕。

廿九日石齋翁贈鯉魚雙尾於先生。潑刺躍籃。附以詩。先生次韻以謝。余亦次韻呈翁。

杳然乘筏隱江湖。養得天真綽有餘。德教行看洋溢處。芻蕘雉兔亦知書。  
湖字亦原韻

伊藤君招飲。使一紅袖行酒。興更濃。

過午先生與士胖君上歸途。赴登戶村海爲隣樓蓋應縣官及舊門人之招也。前日誠齋宅所會諸君。悉送到養老川。川上曰町田村。桃花數千株。錦繡爛然。誠齋導先生入林中。殆迷方嚮矣。林外碧流一道。蜿蜒如長蛇。即養老川也。時方夕陽。紅綠相映。使人有武陵溪上之想。余次先生勿來關韻賦一絕。遂飲別。

遠、處、疑、雲、近、處、霞。幾、人、尋、到、夕、陽、斜。偶、隨、流、水、杳、然、去。便、是、武、陵、源、上、花。<sup>23</sup>

卅日余與貞吉追從先生於海爲隣樓。先生見示所獲七律。余乃次韻賦所見。

笑卸奚囊袖浦潯。追陪漫試醉餘吟。雲知人意展仍卷鷗與吾生浮又沈。何處隨風長笛動。此間沿岸書樓臨。萬千氣象坐呼吸。偏覺師恩如海深。<sup>24</sup>

卓午辭樓。先生乘誠齋所具車。余輩三人駕馬車歸。此日天氣澄霽。眺矚之美。非復前日之比也。車上得一絕。

來、時、是、雨、去、時、晴。晴、雨、風、光、各、樣、清。到、處、詩、人、知、己、在。青、山、如、送、水、如、

迎。

黃昏達京。次先生寄千葉縣令詩韻。

歸來神逝總南州。唱和杯盤樂事悠。匆、率、解、囊、先、一、笑、。探、春、遊、是、探、詩、遊、。

余平生不好作詩、然每出遊、觸興應感、必賦以代日錄、故其詩粗惡、不啻瓦礫、常招世人譏笑、此遊幸携足下、足下年少才敏、每余詩成、在側必次韻、句句珠玉、篇篇錦繡、能使余瓦礫發光輝、嗚呼、余門有出藍之才如此、所謂惡言、不聞于耳者、將於是乎在矣

丙戌夏五 中洲老人毅識

卷中諸作概係次韻、多多益辨、曾無滯滯之痕、足見才之敏而腕之靈、中洲翁門、雖多能文之士、不得不先屈指山下兄矣

丙戌五月廿八日 梅山隱士長顛妄評

伴得仙師東道裝、寒流石上笑褰裳、提胡小鳥啼郊外、拾翠幽人愛夕陽、春樹綠生千葉縣、夜梅香古一花莊、憐君寒瘦詩標格、弟子韓門獨擅場

丙戌五月、森大來拜讀、題一律以代總評

陪遊錄跋

羹之與炙、味雖異、其悅口一也、詩亦然、以我淡笑彼濃、以我巧譏彼拙、猶羹者炙者不相容、豈能知味者哉、歲丙戌春、中洲先生、應家君之招、遊其梅花村莊、有詩曰、南總應酬詩錄、門人請付之活版、先生命附錄舅氏山下鹿峯君詩於其後、可謂羹炙共陳而口味得全矣、顧貞亦辱陪遊而不能捨先生餘唾、今跋之乃所以書其憾也、嗚呼、世之讀此跋者、若曰羹炙既陳矣、山蔬野筍不足復陳、則亦非能知味者也

千葉貞吉謹撰

資料三十七 正風俗策<sup>上</sup>

当該資料は、明治二十一年十二月二十四日発兌『学』第六号（江東義塾学会）に発表された随筆である。程頤の「定性書」の思想に基づいて、当時の時勢を批判し、歴史的には、前漢の文帝、唐の太宗を政治の成功例としてもちあげ、前漢の武帝、唐の高祖、北宋の神宗を失敗例として挙げて、事態を解決する方策は、結局「制度の私愛を節し、以て道德の本心に反るのみ」と結論している。文中に「どこどころ、割注の形式で三島中洲の評論が挿入され、さらに文末に、三島中洲の「正諭並び行われ、反覆して厭わず。蘇文を讀む如く、議論、尤

も時弊に切當す（下略）」とする総評、さらに、続緑海の「聽雨詩」に次韻した昌胤の漢詩、この詩に対する笠原（笠原であろう）東郷の詩評が付されている。

続緑海は、名は敬太郎、緑海と号した。佐倉藩成徳書院総裁・続豊徳の長男。その履歴について、委細は不明であるが、東京品川で教員を務めていたことや、明治三十年に千葉県千葉町に住していたこと<sup>(25)</sup>がわかつてゐる。その妻は、藩校医学部教授中里忠庵（水翁）の次女<sup>(27)</sup>。二松学舎の佐倉達山とも交友があった<sup>(26)</sup>。

該資料は上篇と銘打たれているが、下篇は、現在のところ見つからない。あるいは、書かれなかったのかもしれない。なお『正風俗策上』の原典には、もともと、句点と圈点がついている。本稿もそれをそのまま反映した。ただし、三島中州の総評、昌胤の漢詩の詩題、笠原東郷の詩評には句点が付いていないため、独自に付した。原文は、国会図書館デジタルライブラリーでも閲覧できる。

正風俗策上

鹿峰 千葉昌胤

有溺于色者。留連荒亡。無所忌憚。此人也既喪其本心矣。諫之則激。不諫則將傷精破産也。爲之父兄者。果何術以處之。與拱手視其弊。寧節私愛反之本心耳。藥不瞑眩其病不愈。是智者處變之斷也。甚矣世之溺西洋制度。而喪我國固有之道德也。夫道德心也。制度手足也。天下何人無手足。何國無制度。然徒恃制度。而不本道德。猶不依心而動手

足也。雖能知覺行止。如醉人狂夫。其不亡身者幾希。中略曰繇此觀之。心與手足。必不可相須。而道德之於制度。亦必不可相離也。昔者孝武作均輸平準法。興利佐費。而天下瘦矣。神堯定均田租庸調法。而民以安。均治制度也。而其效之所以相反者。無他在於捨道德與否耳。前鑑如此。而上下擾然。不啻不信我之心。反併其手足。借之他人。是率上下溺色也。欲其不傷精破産得乎。是故斂愈急矣。而國債山積。倉廩匱缺。法愈密矣。而兇徒出沒。學愈開。不足以化子弟。武愈張。不足以禦外侮。有司愈營其私。庶民愈移其業。夤緣姦黠之徒愈增。而節義廉耻之士愈減。奢侈淫逸之風愈行。而儉素質朴之習愈止。又曰十箇愈字愈出勢不可禦嗚呼世道風俗之廢潰滅裂。一矣至于此也。今而不救藥。國家命脈長短未可知也。然則其策何如。曰節制度之私愛。以反道德之本心而已矣。孝文以德化民。宮室苑囿。車騎服御。無所損益。風俗敦厚。家人給人足。西漢之盛。以此爲第一。太宗即位。從魏徵言。行仁義之道。去奢省費。輕徭薄賦。風化之美。東至于海。西及五嶺。三代以還未之有也。夫穀之養人也。終始不更。有魚菜者。日新其種。以調其味。人或斥穀曰。是陳耳迂耳。而徒用魚菜。豈不枯死乎。如神宗立新法是也。彼孝文太宗獨可謂善知所養矣。居今日之弊。欲免枯死。則不可不減魚菜以飭于穀也。苟上而先試之。下烏不從。上下共改養。而國家肥矣。夫然後世道可得而復也。風俗可得而正也。國家命脈可得而長也。是所謂生死肉骨之道也。嗚呼螻蛄噬指。非截手則不免毒。當路君子豈可無此勇斷哉。又曰好



三島中洲曰 正喻並行、反覆不厭、如讀蘇文、議論尤切當時弊、然醉夫狂人聽之却目、言者爲醉夫狂人亦不可知、評畢長大息者三

佐倉續綠海見寄香山詩紀、乃次卷中聽雨詩韻、賦以代總評

千葉 鹿峰

養病遊兼避暑遊。浴餘笑倚夕陽樓。蓬々雲出岫頭去。灑々泉廻巖角流。興到有詩忘曆日。閑來無夢落封候。欽君一種傳神筆。描取香山畫裏秋。

竺原東郷云、運腕綽々、不見窘苦之態、僕固服君別才也

### 資料三十八 「漢詩」一首

当該資料は、明治二十二年五月十五日付『東海新報』「雜録」に収録された漢詩である。題辭によれば、そもそも千葉県会議員清宮廉堂がその祖父清宮秀堅の遺著を出版しようとした際、川田甕江<sup>30</sup>がそれに對し、詩を詠んで寄こした。そこで、廉堂はその川田の詩に百首の次韻を付けようと画策した。その話は同じく県会議員を務めていた千葉禎太郎を経て、昌胤にも来た。そこで、昌胤は廉堂と秀堅を称賛する次韻を詠んだのだという。当該資料は、この昌胤の詩のあとに、川北

梅山の詩評が添えられている。さらに、その後統部分に旧市原郡今富村の伊藤宣太郎、同村の小出寛作の詩が添えられている。なお原典は、もともと、詩には句点と圈点、散文には圈点のみがついており、詩評は白文のままである。本稿は詩については、それをそのまま反映し、散文と詩評については、独自に句点を付けた。さらに、左記原文中における鍵括弧は、原典に付されていたものをそのまま反映したものである。

清宮廉堂は、安政三年二月一日、清宮利平治の子として香取郡佐原町に生まれた。幼名は辰太郎、諱は堅実、号は廉堂<sup>31</sup>。字は卓爾、立<sup>32</sup>という名もあつた。四歳のとき父と死別し、十七歳で家を継ぎ、十一代利右衛門を襲名した。祖父秀堅は『下総旧事考』の著者。幼少の頃は祖父の膝下で養育され、長じては鹿島吉門について漢籍を学び、のち並木栗水に学んだ。明治九年、十九歳にして香取郡佐原町初代戸長についた。明治十九年三月、県会議員に当選した。県会においては、常に卓越した意見を述べ、よく審議の動向を導いた。特に土木事業に關して大きく貢献した。同二十三年、議員退任後は、佐原町会議員を八年間務めた。また、教育・文化の振興に對して志厚く、明治十五年。桜崖塾を設け、また祖父の遺稿や『香取文書纂』を刊行した。巖谷一六、村岡良弼ら漢学者との交わりが深く、自らも優れた詩文を作り、『廉堂集』を上梓した。大正三年三月二十日死去<sup>33</sup>。その妻外山氏との間に二女あり、津宮村久保木惟敬を婿養子に迎える。惟敬は利右

衛門と称し、町会議員を務めた。<sup>(34)</sup>

清宮秀堅は、文化六年十月一日、清宮尚之（号滄州）の子として、香取郡佐原町に生まれた。字は穎栗、小字は秀太郎、のち総三郎、ついで利右衛門。号は棠陰、鎌浦漁者。秀堅は、四歳のとき母が死に、九歳のとき父が死に、その後、祖母に養われた。若年時、詩画に長じていた父の著書を読み、人には学問が絶対に必要であり、学ぶならば、実用を旨とすべきと考え、学問に励んだ。しかし、祖母が存命であるため、遠方に遊学することをせず、津宮村の久保木竹窓、常陸朝来の宮本茶村など、先輩に疑義を質すにとどめた。その頃、家産が大いに傾いていたため、秀堅は粗衣粗食に甘んじて、懸命に努め、経営を回復した。二十七歳、里正となり、二年で職を辞し、領主津田氏の命により、苗字帯刀を許された。天保十三年、領主津田氏に給人格に拔擢され、数年で財政を黒字にし、章服刀剣を賜り、土席に列せられた。津田氏が駿府加番となると、半年間付き従った。この間、前後二十余年間、いつも伊能徳輝と協力して、財政の回復に努め、ついに物頭席に進んだ。文久三年、水戸の浪士が四方を荒し、佐原もその被害を受け、村吏は逃げたが、秀堅は徳輝と協力して、これに身を挺して応じた。のち、堀田領となり、浪士が討伐されるようになると、秀堅はこれに物資面で協力し、堀田侯に賞され、謁見を賜った。明治五年、印旛県に招聘されて、地理について諮問され、同六年、新治県に地理編集の任にあたることを命じられた。そこで、香取、海上、匝瑳

三郡を歴訪し、『三郡小誌』を著した。明年、辞職する。晩年、権中講義に任用された。このとき、『三条余論』を著した。また、私財を投じて、本村から十七村にかけて道路の補修をした。これにより、銀杯を授けられた。八年、村政の冗費をばぶき、地租を改正して、田畑を測量し、常に隣村同志で境界争いを起こしていた佐原新田を整えた。七十歳、生輓詩を作り、日頃愛玩していた書物、画などを親戚友人に送り、これより隠居し、読書にいそしんだ。ある者に書物を読む者は往々にして家産を傾けるので、嫌われるといわれると、笑って、それは真の読書人ではないと答えた。また、財産を貯える方法について問われると、収入に応じて出費を制御することだと答え、場当たり的な投機を警めた。十二年十月二十日、死亡。秀堅は日頃、坐る際は、正坐をし、語気は深沈で、その人柄は、寛大であると同時に謹厳であった。日々の生活は質素で、そのかわり窮迫者をよく助けた。藤森天山、大橋訥庵、塩谷岩陰、色川三中、黒川春村、伊能穎則と交流をもった。平生、本居宣長（とりわけ『古事記伝』）、頼山陽（とりわけ『日本政記』）を好み、その学問に服した。<sup>(35)</sup> 秀堅は史学、地理学に長じ、その学問は、空想に拠らず、実証と緻密な考証を根幹とした。刊行された著書として、『下総旧事考』『新撰年表』『下総国図』『近古詩鈔』『北総詩話』『地方新書』『雲烟略伝』『外史劄記』『香取新誌』『古学小伝』『三家文鈔』『国体正論』があり、未刊行のものとして、『経邦或考』『存家文稿』『棠陰遺稿』などがある。妻久保木貞との間に、

一男一女ができたが、男利平治(字、堅直、号逸堂)が早世したため、笹川村の多田文三を婿養子に迎えた。文三には、一男一女ができたが、利平治の遺児・立(字、卓爾)に跡目を継がせた<sup>(37)</sup>。

伊藤宣は、伊藤祐真<sup>(38)</sup>の字は和卿、号は寿江、初名は宣太郎<sup>(39)</sup>。文久三年二月十九日生<sup>(40)</sup>。今富村名主伊藤重左衛門貞直の長男。幼少から学問を好み、明治三年八月、小貫庸徳に従って漢学を学び、庸徳が北海道に転じた後は、成瀬大域に従って書法を学び、成田淡堂、荻野月瀬、片山謙堂について漢学を学び、後、更に、東京にまで出向いて、小永井岳の門に入り、経義歴史を講究し、詩文に涉り<sup>(41)</sup>、傍ら、大河原菊山、大教正細田朝義に五行学を学び<sup>(42)</sup>、鹿陰道と号した。明治十六年、父の命により帰郷し、家業を継ぎ、村治に従事した。村民に対しては、徳義を軸に接し、貧窮者・困窮者の救済を重視し、また道路橋梁の土木に力を尽くした。古事を探究するのを好み、我が国建国の旨趣を明らかにして、敬神・忠君・愛国の三条を重んじ、常に村民にこのことを教示した<sup>(43)</sup>。明治二十五年、今富村の鎮守・海上八幡宮の大破を嘆き、同志とともに寄付を募り、改築竣工を遂げた。また、同志とともに株式会社五井銀行を設立し、その取締役となった<sup>(44)</sup>。海上村長を長く務め、さらに郡会議員などを歴任した<sup>(45)</sup>。大正九年当時、田畑山林などをあわせて、七十一町歩余りを有する今富を代表する素封家であった<sup>(46)</sup>。昭和九年十一月十二日没、享年七十二歳、築光院心蓮祐嚴<sup>(47)</sup>居士。

小出寛は、小出寛作のこと。旧今富村の小出廉平の長男。明治元年二月十三日生、明治二十六年五月十三日相続、昭和十四年十月二十五日没(野田里美氏所蔵「小出家除籍謄本」)。地域では能書家として知られており、旧分目村慈眼寺内・岡田家墓地における「隆照院堅哲成徳居士」墓碑、旧海保村中谷地区における井口松山翁碑、旧新堀村法光寺内の「高橋日円碑」はいずれも寛作の書による。また、旧白塚村徳蔵院内・鮎川家墓地における「鮎新院梨山道全居士」墓碑(小出栗卿寛書と記される)も、書体から言って、やはり寛作の書だろう。

なお、川田甕江の詩とその詩に対する次韻の数々は、明治二十五年一月、『百顆珠』と名付けられた詩集に集積され、清宮廉堂によって出版された。昌胤の文と詩は、同書七頁(国会図書館デジタルライブラリー)に収載されている。ただし、二箇所に渡って出てくる「傲顰」は「傲顰」に、「鳥跡」は「鳥跡」に、「蕙芷」は「芷蕙」に改められ、「己丑春三月」が削除されている。

頃者、家兄寄簡曰、吾同職縣會議員廉堂君、編其祖業陰先生遺著、命剗嗣氏、偶獲甕江川田翁詩、乃更索次韻百首將爲附錄、子其傲顰、顧余未知廉堂君、又未見其遺著、何以賦之、賦而不免架空、不如不賦也、退而再思家兄每在議事堂毅然唱公義、不負民望、今廉堂君亦家兄之友、則其人可知已、雖未見其著、於傲顰何嫌之有、但余久耽蟹文、不復顧鳥跡、是以詩思荒涼猶未學時、而遽舐毫呷

吟、固不足以與諸家、競妍媸於鍊字烹句之間也、次韻僅成、依家兄致之廉堂君、竊以代永好之贅耳、己丑春三月

鹿峯 千葉 昌胤

他日功名照汗青。勞身國事不曾停。有斯孫豈無斯祖。々業馨於蕙芷馨。

川北梅山曰、命意運筆、慧敏而適健、絶無次韻之痕、何等老手

送友人婦鄉 壽江 伊藤 宣

送君江畔夕登樓。垂柳枝長惹暗愁。今夜扁舟何處泊。水光一碧思悠悠。

春日偶成 梅南 小出 寛 作

照眼春光好。東風賣酒旆。梅欵高士帽。柳染美人衣。妙意鶯歌和。痴情蝶夢飛。此中詩趣足。村巷俗塵稀。

### 資料三十九 「漢詩」 十三首

当該資料は、明治二十三年一月二十四日付『東海新報』「文苑」に収録された漢詩である。題辞によると、明治二十三年正月十一日の夜、川北梅山が手紙を寄こし、昌胤に新正の作を送ってきた。昌胤はそれに感動し、次韻して進上すると、翌日、川北は再び三首を昌胤に寄せてきたという。その際、川北は「余は新正の詩を書きて鹿峯に示

す。鹿峯、即時に次韻して返さる。余は其の老夫に挑むを知ると雖も、勢、臂を攘わざるを得ず」と言ってきた。昌胤はそれに応戦し、結局、十四日朝までに、さらに十二の次韻を作成した。川北もこれに對抗して、漢詩を詠み、結局、総計十三首を昌胤に寄せた。かくして川北と昌胤の間に実にユーモアある戦争が展開したわけであるが、ここでは、そのいきさつやその際の心理的葛藤が、昌胤の側から散文で記され、それに次韻が添えられる形で記されている。当該資料は、この昌胤の詩のあとに、川北梅山の「才鋒は刀の如し、鋭、當る可からず。人をして數里の外に辟易せ使む」とする詩評が添えられ、さらに、その後続部分に千葉義胤の詩、さらには、それに対する昌胤の詩評が添えられている。なお原典には、詩評を除き、もともと、句点と圈点がついている。本稿も、それをそのまま反映した。詩評については独自に句点を付した。

庚寅正月十一日夜。吾梅山川北先生付郵筒辱見示其新正作。予感誦不能措。乃次韻以呈。翌日先生復疊三首見贈。且戲書曰。余書新正詩示鹿峯。々々即時次韻見返。余雖知其挑老夫。勢不得不攘臂。乃疊三首却寄。嗚呼予豈挑先生哉。但自客臘從事翻譯。逢此新正。未得一詩。於是竊自(警)曰。好機會不可失矣。且次且呈。遂至十三首。詩云。匪女之爲美。々人之貽。是真先生之貽也。抑想往歲予與三嶋中洲翁。試櫻花詩鬪。互至十首。而翁每詩成。一々書箋見賜。其後。予訪先

生。談偶及之。先生直次十首賜予。々乃共裝爲幅。珍藏以爲家寶。今也先生之見贈于予者亦十三章矣。章々書箋。洵不可復獲也。急命爲幅。與前二幅。挂之書齋。焚香朝夕拜之。其寶之與樂果如何哉。當改寫蕪稿併書存之云。

鹿峯 千葉昌胤謹識

今宵八時見示尊什。(感) □癸禁。乃急次瑤韻。竊以呈函丈。一警請付諸燧人氏。一月十一日夕

不必求奇自脫陳。一篇拜看墨光新。白梅花底夢應好。身是(穢)皇以上人。前日訪先生。盆栽白梅盛開。滿室爲香

昨宵次韻但表謝意已。而先生則曰。挑老夫。安知無非先生之戲挑小子哉。遁而不應怯也。應而敗命也。乃亦做響。漫疊三首。十二日夕

一片花箋珠玉陳。更驚句句賦來新。吾當擲筆避三舍。近世詩壇老聖人。

詩、通、文、債、積、陳、々、。箇、裏、迎、來、鳳、曆、新、。却、笑、風、流、太、多、事、。閑、人、亦、自、作、忙、人、。

次韻(偏)窮一字陳。推敲幾度不加新。愧吾瘦腕小於筆。錯被他呼才子人。

矢折丸盡。斃而後已。復疊三首。同夜

家貧無復盞盤陳。好以新詩賀歲新。一樣世間皆醉倒。居然笑擬獨醒人。

交道難求雷與陳。忍看輕薄士風新。從誰乘筏杳然去。々作江湖一散人。

自古儒生多腐陳。只知溫故不知新。誰憐一往(嚶)々志。事業文章兼備人。

誤陷先生挑戰之術中。叱咤奮鬪。遂至十回。矢於是將折。丸於是將盡。竊請先生幸容降乎否。然若謂不容。則致死不去耳。呵々羞々。十三日朝

世、間、底、爭、漫、嫌、陳、。不、識、陳、中、却、有、新、。吾、道、真、成、如、日、月、。照、臨、四、海、八、荒、人、。

滿腔經濟向誰陳。時勢民情日々新。却恐蕭牆分黨閥。大之誤國小之

漫然執筆漫然陳。十首詩篇無一新。結局豈論勝敗決。算來吾是術中人。

更留一首以爲殿

戰迹由來史上陳。忽開詩鬪事何新。分明知是太平象。不待當年賣卜人。

昨留一首爲殿。今朝曉起出幕。果有伏兵六騎。自門外來襲。小子早斬四騎仆之。而二騎銳鋒不可當。進退惟谷。忽想昔孟嘗君有鷄鳴之客。脫身函谷關。今吾詩雖拙。豈不優鷄鳴乎。乃漫哀吟曰。

十四日朝

投轄留賓遵姓陳。當年佳話口碑新。如今侯伯那痴絕。不愛才人愛美人。

時偶有休戰之令。氣色始蘇。賦此。謝而退。

矢折兵疲空陣陳。敵軍乘隙運籌新。無端明將令休戰。始作太平高枕人。

才鋒如刀、銳不可當、使人辟易乎數里外

老夫亦爲才子所曠、不問工拙、多々益辨、遂疊至十餘首、雖未足以示人、亦新年一（牒）也

六十九翁 梅山長顓妄評

庚寅新年作

宕山 千葉義胤

過眼春風天地新。賀正客漲腕車塵。笑吾遊學儘無事。先認一書輪兩親。

鹿峯曰、書生實況輕々（着）笨、自有真味

資料四十 「漢詩」一首

当該資料は、明治二十三年一月二十五日付『東海新報』「文苑」に収録された漢詩である。昌胤が『東海新報』で千葉県会議員板倉中の漢詩を見かけ、それに対し次韻した詩が掲載されている。この詩を通じて、昌胤は、新春時、万物の胎動が予感されるもとで、自由党の志士として活躍する板倉に期待を寄せている。なお原典は、もともと、詩には句点がつき、散文には句点がついていない。本稿は、詩につい

ては、それをそのまま反映し、散文については、句点を付けて示した。

板倉中は、幼名は清太郎、号は春峯。安政三年九月一日、長生郡関村に生まれた。<sup>(48)</sup>板倉家は、里見家の客将板倉大炊介の子孫といわれ、代々儒者を輩出した家であり、祖父篤順、父周二ともに漢学で名声をなした。<sup>(49)</sup>二十歳のころ、東京に出て明法学会に学び、箕作麟祥、河津祐之、大井憲太郎などについてフランス学を修め、法律を学ぶ一方、自由民権運動に傾倒した。<sup>(50)</sup>明治十三年、代言人試験を受け、合格し、明治十六年、代言人となった。<sup>(51)</sup>同十七年、夷隅郡下の以文会員十数名が加波山事件に連座して捕えられたとき、釈放に尽力した。<sup>(52)</sup>同十九年、県会議員となり、同二十年、大阪事件の弁護をした。<sup>(53)</sup>同二十一年、同志と謀り、東海新報を設立した。同年、民権運動の盛り上がりを受け、県知事船越衛を槍玉にあげて更迭させ、同二十二年、地方税預替の県議案を提出して、同案を可決させ、さらに議長池田栄亮を退職させ、翌年、代わって議長に推薦された。同二十三年、第一回衆議院議員となり、その後大正五年まで衆議院議員を務めた。衆議院では、朝鮮との国交問題、普通選挙問題、師団増設問題で活躍した。特に普通選挙に関しては、尾崎行雄、河野広中らとその実現に努めた。<sup>(54)</sup>漢詩、和歌、俳諧、囲碁、将棋に長じた。昭和十三年三月五日死去。

なお、昌胤が次韻した板倉の詩は、現存の『東海新報』紙上には認められないが、『春峯詩稿』（執中館、一九三四）八頁に収載される

「庚寅新年作」「曉登高閣舉椒杯。瑞氣氤氳萬里開。遠近煙埋瀨水柳。高低雪點傍涯梅。帆檣靜列海灣裏。車馬喧奔城路隈。騷客獨歎忙歲月。東風又是促春來。」がそれにあたると思われる。

春峯板倉君、我縣下衆議員候補者之一人也、涉獵政法理財之學、傍善詩、頃予於東海新報見其新正七律、乃次韻却寄

清晨起掃舊吟墓、喜看乾坤氣象開、爐畔迎春溫綠酒、檐前帶雪折寒梅、聖恩已及普天下、憲法將敷率土隈、從此須應伸驥足、公論一縣屬君來

庚寅新正

鹿峯千葉昌胤初草

#### 資料四十一 『中洲先生華甲壽言』所載「漢詩」六首

明治二十三年十一月二日、三島中洲の六十一歳の祝賀が浅草の鷗遊館で開催され、この際、『中洲先生華甲壽言』が上梓された。<sup>(55)</sup>昌胤も三島の漢詩に対し、漢詩六首を次韻している。該書は、二松学舎大学に貴重書として所蔵されている。このたび、これを特別に閲覽させて戴き、昌胤の漢詩を本稿に収載することができた。なお原典は、もともと、句点とレ点、一・二点が付されていた。本稿は、レ点、一、二点は省略し、句点については、そのまま反映した。ただし、一部、句点の打ち漏れが認められたため、それについては補った。

まず、冒頭にある三島中洲の漢詩を掲載する。<sup>(56)</sup>

六十一誕辰自述 三島中洲

六十年來何所爲。世途歷盡幾欒臈。遶階流水迂而直。出屋長松老益奇。學不遇時聊自樂。仕唯爲祿豈嫌卑。斯文猶喜未全墜。弟子三千誤喚師。

十一月二日門人相謀。延余於澤涯鷗遊館。賀華甲。遠近來會者凡二百人。席上賦此以謝

正逢六十一生辰。勸酒青衿盡軼倫。此宴不容門外漢。桃言李笑別成春。

十一月一日司法省行裁判所構成法。余以判事休職。終身賜現俸三分之一。賦此紀恩。

致仕依然帶吏名。千秋竊比巨源榮。風流判事自吾始。審月問花終一生。

以下が、中洲の詩に次韻した昌胤の詩である。<sup>(57)</sup> 題が「同」となつて

いるが、この前に掲載されている別人の詩が「庚寅九秋敬次瑤韻以奉祝」と記されているので、それと同題ということであろう。

同 鹿峯 千葉昌胤

恩牛怨李彼胡爲。世路回頭太險巖。學化王朱知合行。文融蘇歐正兼奇。維持名教樂無倦。比較先賢功豈卑。到底難辭朝野望。半身作吏半身師。

大作短篇任手爲。唯看平坦不看巖。三千徒望龍珠美。六十齡添鶴髮奇。池水官情自深淺。庭松人品孰高卑。眼光紙背透如炬。豈是尋常章句師。

斯道胡憂墜地爲。有吾翁在撐頰巖。守厨老婢亦知字。侍座小童時問奇。誰料經綸胸欲溢。徒稱文學眼何卑。鬢絲如雪顏如玉。骨相堪標百世師。

一夢廿年無所爲。始知行路似登巖。任他名利沾沾喜。獨我才情磊磊奇。其至矣乎窺道輿。不容然後咲天卑。窮通畢竟非人力。聊以文章好報師。

文章我每苦心爲。筆路唯嫌陷怪巖。求淡要求濃後淡。探奇好探正中



奇。歐蘇以上性情古。陸范而來品格卑。休笑韓門狂弟子。漫期不必不如師。

觀於海者水難爲。跼促憐他説抵巇。處世曾慚圭角銳。臨父敢讓性靈奇。循循魯論誦來美。擾擾楚冠看去卑。富貴不淫貧賤樂。一瓢飲亦有餘師。

#### 資料四十二 「玄武石記」

当該資料は、明治二十七年二月二十五日発兌『地学雑誌』六卷二号（東京地学協会）に収録された漢文である。一八九〇年を前後にした十九世紀最後の時期、福島県は連続して火山被害に襲われた。先ず明治二十一年七月十五日、磐梯山が突然大爆発を起こした。この印象のさめやらぬ明治二十六年五月十九日、吾妻山も噴火した。この際、時の政府は東京から三浦宗次郎、田中館愛橘、大森房吉らによる調査チームを派遣し、すぐさま吾妻山の噴火状況を調査させた。その際、調査メンバーの一人として参加していた三浦宗次郎が、同年六月七日、再噴火に遭遇し、本邦未曾有の悲劇に見舞れた。該資料は、その三浦が蒙った悲劇を形見として送られた玄武石にことよせて、生々しく描写している。題詞から、当時、昌胤は日本中学校に教師として在籍しており、その校長杉浦重剛<sup>88</sup>が三浦宗次郎と面識を有していたため、杉浦に委嘱されて書かれたものであることが窺える。文末には、

三島中洲と川北梅山による総評が付されているが、ここからも、当時、昌胤の筆力が高く評価されていたことが窺える。なお原典には、題詞と総評を除き、もともと、句点と圈点がつけられているが、本稿も、それをそのまま反映した。題詞と総評については独自に句点を付した。原文は、国会図書館デジタルライブラリーでも閲覧できる。

三浦宗次郎は、明治十三年、東京大学理学部に入り、明治十七年、地質学科を卒業した。その後、静岡県師範学校に任用され、中学校教諭を兼ね、のち佐賀県に移ったが、「吾が志こゝにあらず。なんぞ久しくここに□せんや」と言つて、七月、教員生活を止めたという。明治二十年には、農商務二等技手に任ぜられ、地質調査所勤務を命ぜられた。同二十一年、農商務技師試補に任ぜられ、さらに同二十四年、農商務技師に任ぜられ、高等官七等に叙せられた。同年十二月、従七位に叙せられ、そして、同二十六年六月七日、死亡した。「故三浦理学士伝」には、以下のように記され、その人となりがよく窺える。「君少にして活発すこぶる能弁たり。壮年に至るに及び漸く変じて深沈寡言の性となり、喜努色に見せず、生徒を率い端正自ら持して、かつて倦怠戲謔の容なし。すこぶるその畏敬する所となる。」「また工手学校の嘱託を受けるや鉱物及び地質の学を教授し、地学協会会員となりては編輯の事を掌る。且つ性すこぶる素朴、また他の嗜好なし。兄徳充氏かつて伝来の什器をさかんと欲す。君固辞して受けず。（中略）常に節約自ら持すといえども、然るに親族故旧の急を見れば、則ち己

のこれを受けるに余力をおしまざるの如し。死の日に当たりては家に余財なくわずかに衣類数領あるのみ。」<sup>(59)</sup>

西松二郎(芳菲)は、安政二年五月、長崎で生まれた。本姓は小沢氏。後、西氏の養子となった。<sup>(60)</sup> 明治三年、十六歳のとき、大阪洋学校で英学を修め、大阪開成学校から、同六年、東京外国語学校に移り、その後、東京開成学校に入学して予科を修め、同十三年七月、東京大学(地質学専攻)を卒業した。<sup>(61)</sup> のち東京大学助教、続いて東京師範学校教員、続いて駒場農学校教員、続いて東京農林学校教員、続いて帝国大学農科大学助教兼高等師範学校教授を歴任。明治二十六年、農科大学辞任。帝国博物館学芸員を経て、明治三十六年、応用化学を専門とする三重工業高校の初代校長として招聘された。杉浦重剛、正岡子規と交友があった。「自分は活きた機械を作るのではない」といい、人間教育を重視した。また鉱物学の教科書や青少年向けの科学読み物の執筆もした。狂歌狂文にも長けた諧謔家としても知られ、放屁の大家を自認して「放屁山人(山に住む屁こき名人)」を自称し、その文字面を優美に飾りたて「芳菲山人」と号した。芝居の評論家でもあった。<sup>(62)</sup> 明治四十二年二月五日、喉頭癌で死去。学生からは「性磊落落脱にして、しかも高雅、謹厳、門下に接するに寛容、世人に接するに円満超俗」と慕われた。<sup>(64)</sup>

### 玄武石記

玄武石塊一箇、故三浦宗次郎君の吾妻山噴火の際に採拾せられしものにして、西松二郎君の手を経て之を獲たり、三浦君は曾て我々に於て教授せられし縁故もあれば、永く此石塊を保存して同君の記念となさんとす、因て漢文講師千葉昌胤君に囑して、其由を記すと云爾

日本中學校にて

杉浦重剛誌

嗚呼。一拳石耳。視之猶睹三浦技師。我杉浦校長使余記之。其意豈不悲乎。<sup>(65)</sup> 校長語余曰。技師爲人。寡言有膽氣。曾入大學。修地質學。爲理學士。後教授我東京英語學校。始俱相知。尋拜農商務省技師。黽勉盡職。能名藉甚。明治廿六年五月十九日。吾妻山噴火。省命技師檢之。既至。滿山鳴動。灰迸石飛。笑曰。是吾學術好試場也。<sup>(66)</sup> 鼓勇奮登。檢畢而歸。齋噴口石片。托西芳菲贈我。即玄武石是也。翌月四日再噴。勢更烈。技師復奉命往。遂殞于焦巖爛石之間。而斯石獨存。每與芳菲撫之。相顧愴然。子其爲記焉。余聞之。酸鼻殆不能執筆也。然殺身奉公。仰不負所仕。伏不愧所學。斯人與斯石。豈可不並記而永傳哉。石黝然而黑。全身斑點。亦帶灰色。技師頭碎脅劈。血痕淋漓之狀。髣髴在眼也。<sup>(67)</sup>

於日本中學校

鹿峰 千葉昌胤撰

三島中洲曰 技師得此佳篇、設令此石碎破、其人終不朽。

川北梅山曰 語氣勁健、筆力老樸、不意成于少年才子之手。

資料四十三 「夢笑廬記」

当該資料は、明治二十九年五月十日発行『詩文』第三卷（第百十一号、共遊舎）に収録された漢文である。ある夜、昌胤が突然目覚めると、学生達がグーグーいびきを出して寝ている中、当時十五歳の越山君だけが仮眠を取りながら、笑っているのに気付いた。このことは一夜だけではなく、毎夜毎夜続いた。その夜中の笑顔を見つつ、昌胤は「天下の笑う可き者多し。擗指して之を笑えば、一年三百六十五日を盡くすと雖も、未だ足ると爲さざるなり。且つ浮世は一の夢場に非ずや」と自覚し、さらに、人間社会にあつては「夢中に夢生ず。萬化に蘧蘧として、一喜一憂、一苦一樂、夢みる所は異ると雖も、其の一の夢場中の人爲るは、則ち均しきなり。安んぞ、醒むる無き人の、口を開け、腹を抱えて、其の側に笑うを知らんや」と悟るに至った。昌胤はこのように、この随筆で技巧を巧みに駆使し、アイロニーを込めて人間社会を批判している。昌胤は、明治二十七年冬に渡韓した後、同二十八年五月に一旦、帰国し、<sup>(68)</sup>同年秋には再び渡韓している。<sup>(69)</sup>この随筆は、その一時帰国の際の出来事を綴ったものか、さもなければ、渡韓前の出来事を綴ったものである。<sup>(70)</sup>なお原典は、全体の九分の八に原

文が綴られ、上方九分の一の箇所詩評が記されている。この詩評は、すべて注で示した。また、原典には、詩評を除いて、もともと、全て句点と圏点がついている。句点漏れも見受けられるが、本稿はそれをそのまま反映した。但し、原典に付されているレ点、一、二点などは省いた。詩評については独自に句点を付した。原文は、国会図書館デジタルライブラリーでも閲覧できる。

夢笑廬記

千葉 鹿 峯

越山生年甫十五。戟眉電眼。身長五尺三寸。才敏警而行篤實。勉強超群。予都講於二松覺。獲生以來。常愛而誨之。一夜夢忽驚。欹枕則四隣。駒。生獨隱几。假寐而笑。乍而粲然。乍而莞爾。乍而唾唾焉。予始不介意。而生夢中之笑。夜夜未嘗絕也。因號其室曰夢笑廬。且告曰。天下可笑者多矣。擗指而笑之。雖盡一年三百六十五日。未爲足也。且浮世非一夢場耶。而蠢々焉蚩々焉者。亦誰不夢中之人哉。短褐長劍。一躍而躋青雲之上者。即夢遊華胥也。破屋傾柱之下。對妻兒歎薄命者。即夢爲楚囚也。講紙上空文。舐古人餘唾。帖帖自喜者。即夢爲蠹魚也。貪婪之徒。夢陶翁之富。功名之士。夢戰國之際。夢中生夢。蘧蘧萬化。一喜一憂。一苦一樂。所夢雖異。其爲一夢場中之人則均也。安知無醒人之開口抱腹而笑于其側哉。今生亦夢中之人也。以夢中之人。爲夢中之笑。予未解其何笑也。雖然。生之夢笑。勉強之餘。困睡而然者乃知其所以笑者。疑惑解而良案出也。字句明而意義通也。運

筆如意。而佳篇立成也。則生之笑。予唯恐不夜夜永且繼也。嗚呼、生學成行修而立一夢場中。實見其可笑者。則舊夢始覺。今之夢笑盧。將變爲醒笑之盧也。姑記以徵之他日。生或以予言爲痴人說夢乎亦笑而不問也。<sup>73)</sup>

注

(1) 以上、拙著「三島中洲、藤森天山、小永井岳、巖谷一六、川田甕江らと千葉県旧市原郡の文人たちとの交流(一)——『南総応酬詩録』『陪遊録』を中心に——」『江戸風雅』第二十五号、江戸風雅の会、二〇二二

(2) 川北梅山 名は長顚、字は有孚、号は梅山。幼名は榮吉、成長して新甫と改めた。伊勢国津の人。文政五年十二月十日、藩城の西古川里に生まれた。幼時から好んで書物を読み、他の子供とは遊ばなかったため、郷里の人々から、知恵遅れと後ろ指を指された。しかし、両親は梅山の学才を見抜き、貧困にあえいでいた家門の興隆を託した。十二歳、齋藤拙堂の門に入った。土井士恭、中内五惇と並んで藤門の三傑の一人と目された。この頃、藩主は齋藤拙堂を督学兼顧問とし、猪飼敬所を招いて賓師としたが、梅山はすでに視聴力を失っていた猪飼敬所をよく助けた。十九歳、藩主に命ぜられて、『資治通鑑』を校訂し、『通鑑校勘記』を記した。句読の師となり、後、助講、ついで講官に登り、時習館の会頭を兼ね、上士に列せられた。長州征伐の際、参謀として参戦した。政府が各藩に人材の提供をつのつた際に選出され、漢学所の管理を命じられた。後、史官に遷り、ついで権大史に任用され、留守権判官を兼ねた。留守の官が廃されると、東京に移り、大史の事を執り、会計課長を兼ねた。西南戦争の際、免職となり、姚武功の「休官夢亦清」の句を取り、その書齋を名付けて「夢清楼」とし、晩年を文学と酒と風流の日々

で過ごした。明治三十八年二月三日没。その風貌は、禿げ頭で、眼光鋭く、その性格は、温良。日頃、南摩綱紀、三島中洲を除くほか、人との交際を好まず、世に阿ることも、世に逆らうこともしなかった。その詩文については、「淡にして枯ならず、潔にして隘ならず、穩秀にして趣味あり。能く拙翁の衣鉢を得たり」と称された(以上、竹林貫一編『漢学者伝記集成』名著刊行会、一九七八、一三〇五—一三〇八頁)。

(3) 森槐南 名は公泰、字は大来、通称は泰次郎、号は槐南、秋波禪侶、菊如澹人、説詩軒主人など。春濤と国嶋夫人の子。文久三年、尾張名古屋に生まれた。鷲津毅堂、三島中洲、金嘉穂について漢学を学んだ。明治十四年、太政官に出仕し、ついで枢密院属、帝室制度取調局秘書、図書寮編修官、皇室令整理委員、宮内大臣秘書官、式部官などに歴任し、また帝国大学文科大学講師となった。槐南は、博識慧敏で、ことのほか詩字に造詣が深く、音韻や明清伝奇にも精通し、明治漢詩壇の第一人者と目された。伊藤博文と多く交流し、四十二年、伊藤がハルビンで暗殺された際、槐南も銃創を蒙った。四十四年、文学博士となった。かつて「新詩綜」を発刊し、また随鷗吟社の盟主となった。四十四年三月七日、死亡(以上、上掲『漢学者伝記集成』一二九一頁)。

(4) 平野猷太郎「その頃」には、「本塾はたしか二階だてで、下に講堂があつて、二階に塾生があたやうに思ふ」とある(『二松學舎六十年史要』二松學舎発行、一九三七、一七九—一八二頁、国会図書館デジタルライブラリー所収)。昌胤もその二階に住んでいたであろう。

(5) 『二松學友会誌』第三輯(『二松學舎学友会』、一八九七、二松學舎大学日本漢学画像データベース)六十三頁所収「彙報」に、明治十四年の「二松學舎入學生名簿」があり、そこに「千葉縣市原郡今市驛千葉傳内」とある。「今市驛」は今富村の誤植である。義胤は上掲『二松學友会誌』の学友会會員名簿にも頻繁にでてくる。

(6) その他、千葉義胤については、上掲拙稿九二頁を参照されたい。な

- お、その生前の姿は、上掲『二松學友会誌』第拾九輯（一九〇六）の巻頭に掲載された写真「明治三十九年五月二十日開中洲先生喜壽二松學舎創立三十年同門凱旋觀迎三賀宴於赤坂溜池三會堂攝影賓主以爲記念」から窺うことができる。
- (7) なお、文中にてでくる、旧市原郡八幡宿の「對潮舎」とその裏にあった「假山」について、筆者は「三島中洲、藤森天山、小永井岳、巖谷一六、川田薨江らと千葉県旧市原郡の文人たちとの交流（一）」（『江戸風雅』第二十五号）において、かつて旧国道沿いに存在した山下家（明治六年「八幡大神上知并現今地景内外」『市原の古文書研究』第三集、市原の古文書研究会、二〇〇九所収）を想定して説明したが、先頃（令和四年十月十三日現在）、同地区の郷土史に精通する山岸弘明氏の調査により、市原市八幡一〇四七番地に、明治末期まで山下家の土地があったことが判明し、しかも、そこに大きな築山が存在し、その頂上に山下亀吉の祖父庸義（俳号、一徳）の句碑（旧市原郡八幡村無量寺内市川家墓地に現存）が据えられていたことがわかった。そこには山下家の本邸があった可能性が強く、ここにてでくる「對潮舎」とは、これを指す可能性が出てきた。もし、そうならば、その場所は、北東側は飯香岡八幡宮の社地とつながり、北側は海を見おろし、北西から西側にかけては、水田と塩田を経て海が広がっていたこととなり、「對潮舎」という名により相応しい。
- (8) 中洲先生曰、古語用得如自然。
- (9) 森槐南曰、一喧一靜、詩理書理、皆在阿堵中。
- (10) 槐南曰、眞摯惻怛。斯作出而廢者、不止寥寥。
- (11) 槐南曰、神韻綿邈、令人意遠。
- (12) 姑原文は「姑」。「姑」の誤植。
- (13) 槐南曰、用筆極靈。
- (14) 槐南曰、曲折如話。
- (15) 槐南曰、中洲先生與二三弟子、探討山水、留連景光、所謂玄桃花映老梅花也、由所見而起興、可以喻三百篇之旨妙。
- (16) 槐南曰、幽雋妍麗、賣珠句用杜詩、新穎乃爾。
- (17) 槐南曰、盡主人身分好句、欲仙。
- (18) 槐南曰、梅花二句、風致橫生。後半微嫌太謙。
- (19) 槐南曰、詩亦似古梅、放縱之筆。
- (20) 陌原文は「陌」。「陌」の誤植。
- (21) 槐南曰、二首插入石湖集中、應有水乳之合。
- (22) 中洲先生曰、余此夜泥醉、爲諸子所扶而歸、實如此詩、慙慙。槐南曰、光景如睹、小詩佳境。
- (23) 槐南曰、詩筆亦閒澹瀟灑。有水流花放之妙。
- (24) 槐南曰、奇情奇景、出以婉切之筆、字字波折有致。
- (25) 『佐倉地方の諸学校・碑文・唱歌』―『佐倉地方の学校教育』別冊四―、佐倉市教育委員会、一九九四
- (26) 上掲『二松學友会誌』第三輯、第四輯、一八九七
- (27) 『佐倉市史』卷二、佐倉市、一九七三、八九二頁
- (28) 横須賀司久『漢詩人列伝』五月書房、一九九七、六〇頁
- (29) なお、続家は学者一家であり、続緑海の祖父作太夫（初名金治郎、天保二年相続、隠居後、友鷗）は、佐倉藩西塾長、同温故堂都講、同兵学院院长、大目付役などを務め、緑海の父豊徳（徳太郎。天保二年生。明治二年相続）も温故堂教授、成徳書院総裁（佐倉市弥勒町松林寺内「古堂統府君墓」、佐倉藩大属分課民曹（『千葉県史料』近代篇、明治初期一、千葉県、一九七八、六〇九頁）などを務めた。緑海の弟達次郎は、明治十一年五月二十一日、続簡の養子となった（以上、特記を除き『佐倉市史』卷二、佐倉市、一九七三、八九二頁）。続簡は豊徳の実弟で、天保五年四月十日生。擧次郎といい、雲巖、敬斎と号した。高岡藩の学校長、権大属に着いたのち、香取郡神崎小学校、集成学校に勤務し、さらに陸軍下士団の漢学教授となった。明治二十七年十一月十一日没（『佐倉市史』卷三、佐倉市、一九七九、九五九頁）。緑海の兄弟には、その他に長女のおぶ、次女なを、三男東作がいた（以上上掲『佐倉市史』卷二、八九二頁）。

(30)

川田甕江 名は剛、号は甕江、執斎、行雲流水書屋。通称は竹次郎、のち城之助と改めた。字は毅卿。備中国浅口郡阿賀崎村の人。天保元年生。幼時、父母を失い、伯父の家で養われた(『江戸文人辞典』東京堂書店、一九九六、一三七頁)。三、四歳時、伯父に剣と書と、いづれを望むかを問われ、進んで書をとったため、専ら素読を授けられた。成長して、郷師鎌田玄溪について学問を受け(上掲『漢学者伝記集成』一二五七〜一二六二頁)、ついで、山田方谷にも師事(上掲『江戸文人辞典』)。後、所蔵する書物を売却した金で、江戸に赴き、古賀謹堂、大橋訥庵について経史を学び、文を藤森弘庵に問うた。安井息軒、塩谷岩陰と交流(上掲『漢学者伝記集成』)。安政四年、近江大溝藩に招かれ、藩校修身堂の学政を確立し(上掲『江戸文人辞典』)、ついで山田方谷の推薦で、備中松山藩江戸藩邸の督学につき、のち、度支副官に転じ、監察に遷った(上掲『漢学者伝記集成』)。慶応四年一月、鳥羽伏見の戦いが始まり、しばらくして幕軍が敗走し、將軍徳川慶喜、松山藩主板倉勝静らが江戸に逃亡すると、備中松山藩は朝敵の名を負わされた。藩士らは恭順の態度を示して城外に退去し、松山城は無血開城した。その頃、藩主を京阪で護衛する役に就いていた熊田恰ら百五十人余は藩主が江戸に逃亡したのち、玉島まで戻ってきていたが、岡山藩側から反逆軍と見做され、熊田恰が自刃して責任を取った。その際、甕江は熊田の目付役を務めた(以上山田琢・石川梅次郎『山田方谷・三島中洲』叢書日本思想家41、一九七七、明德出版社)。戊辰戦争後、官軍に対抗した松山藩の再興が認められた際、甕江は賞禄を受け、ついで権少参事に任命されるが、固辞した。明治三年、東京深川で私塾を始め、のち、牛込に移った。六年、文部省家居修史を委嘱された。修史局が建てられ、一等修撰に任命された。さらに、学士院が置かれ、同会員となった。十四年、天皇に従って北巡した。この年、宮内省四等出仕に補され、大学教授を兼任した。十八年、勲六等に叙せられ、単光旭日章をもらった。さらに文学博士を受けた。二十二年、諸陵

- (31) 頭に任命され、勅任二等、従四位に叙せられ、図書寮博物館事を掌った。また、華族女学校講経となる。貴族院が建てられると、二年間、貴族院議員を務めた。東宮侍読を務めた。明治二十九年、宮中顧問官に任命され、勅任一等、従三位にのぼった。同年二月二日、死去。甕江は他人との間に敷居を設けず、その話はユーモアに富み、人々をよく喜ばせた。しかし、話が正義に及ぶと、襟を正して抗弁し、毅然として屈しなかった。その学問は宋学を基礎とし、さらに明清諸家に涉り、博く経史百家に通じた(上掲『漢学者伝記集成』)。
- (32) 以上『千葉県議会史』議員名鑑、四八二頁
- (33) 『佐原町誌』全、一九七三、名著出版、四七頁
- (34) 以上、上掲『千葉県議会史』議員名鑑
- (35) 以上、上掲『佐原町誌』全、四四五〜五三頁
- (36) 『佐原市史』佐原市役所、一九六六
- (37) 以上、上掲『佐原町誌』全
- (38) 伊藤祐真については、前前稿で触れたが、その後、知り得た事実があったため、大幅な補足を加え、改めて取り上げた。
- (39) 『総房人物論誌』第五編、博聞館、明治二十六年、二六〜二七頁
- (40) 伊藤家所蔵「今富 伊藤家 系譜」
- (41) 上掲『総房人物論誌』
- (42) 『房総人名辞書』六頁
- (43) 以上、上掲『総房人物論誌』
- (44) 以上、上掲『房総人名辞書』
- (45) 『房総・町村と人物』、多田屋書店、一九一八、六七四頁
- (46) 株式会社千葉県農工銀行編「大地主調(拾町歩以上)」
- (47) 旧今富村円満寺内伊藤家墓地、伊藤祐真墓誌
- (48) 『千葉県議会史』議員名鑑、九十九頁
- (49) 上掲『房総人名辞書』二十三頁
- (50) 上掲『千葉県議会史』議員名鑑

- (51) 上掲『房総人名辞書』二十三頁  
 (52) 上掲『千葉県議会議史』議員名鑑  
 (53) 上掲『房総人名辞書』  
 (54) 上掲『千葉県議会議史』議員名鑑  
 (55) 上掲『二松學舎六十年史要』一五頁  
 (56) 一〇二頁  
 (57) 一三〇一五頁  
 (58) 杉浦重剛 幼名は謙次郎、号は梅窓、天台道士。安政二年三月三日、膳所藩藩儒杉浦重文の次男として、近江国膳所で生まれた。藩校遊義堂に学び、さらに維新後、貢進生として大学南校に入り、制度変更に伴い、明治八年、東京開成学校を卒業。同九年、政府留学生として英国に渡り、化学を学んで、十三年、帰国。東京大学理学部博物場掛取締を経て、十五年に、東京大学予備門長となった。十八年、退いて、読売新聞論説に従事。二十年には、小村寿太郎らと乾坤社を創設し、井上馨外相の条約改正案反対運動に参加。翌年、政教社に加わり、雑誌『日本』発刊につくし、国粹主義を唱導。同年、文部省参事官兼専門学務局次官となったが、二十三年、退官して、衆議院議員に当選。翌年、議員を辞職した。この間、新聞『日本』を後援、日本倶楽部に参加、大隈重信外相の条約改正反対運動に尽力した。二十三年、東京英語学校長となり、二十五年に校名を日本中学校と改め、死ぬまで校長を務めた。二十五年から三十七年まで、東京朝日新聞論説員。また称好塾を主宰して、青少年の教育に力を尽くした。また高等教育会議議員、国学院学監、東亜同文書院長、教育調査会会員を歴任した。大正三年、東宮御学問所御用掛となり、倫理を担当し、同十年に退任。大正十三年二月十三日没。著書『鬼哭子』で「理学宗」を提唱し、人事の解釈に理学の応用を説いて、国粹主義でも異彩を放った。また、未開放部落の南洋移住論を提唱した『焚燬夢物語』は国権論的部落解放論の先駆として注目される(以上、『国史大辞典』第八卷、六八頁)。

- (59) 以上、佐藤博之「明治26年吾妻山殉難記 百年史のこま(4)」『地質ニュース』no.374、一九八五  
 (60) 以上『松坂工業高校百年史』山本恭嗣、更家章太発行、二〇〇二  
 (61) 東川吉嗣『西松二郎先生の間人教育』与野書房、二〇二二、九〇一頁。同『芳菲山人西松二郎先生文献案内』与野書房、二〇二二、一四〇一五、二〇〇二、三〇〇三頁。同『正史と外史』与野書房、二〇二二、四〇〇四五頁  
 (62) 上掲『松坂工業高校百年史』  
 (63) 以上、上掲東川吉嗣著書  
 (64) 上掲『松坂工業高校百年史』  
 (65) 中洲曰、突然而起、忽然而至、猶吾妻山墜石亂飛。  
 (66) 梅山曰、技師膽氣可想。  
 (67) 中洲曰、當時状況如目睹、使人酸鼻不能再讀。梅山曰、一結有情色、無此不成文。  
 (68) 上掲『三松學友会誌』第式輯、一八九六、五十七頁  
 (69) 上掲『三松學友会誌』第三輯、一八九七、四十五〇四十六頁  
 (70) 帰朝の間、昌胤は、上掲の講堂の二階で寝泊まりしていたのであるうか。  
 (71) 梅山曰、一句引起多少議論。  
 (72) 又曰、一句承上起下。  
 (73) 又曰、夢笑二字取得甚佳。

キーワード 千葉昌胤 三島中洲 川北梅山 板倉中 杉浦重剛